戦旗

一九六〇年六月七日発行
発行所
新宿区東大久保二の一五五
世界労仂運動研究所
編集発行人 鏑木潔
一部 拾円

万国の労仂者団結せよ！
革命的前衛・共産主義者同盟を
すべての工場に組織せよ！
共産主義者同盟

「戦旗」固定購読
お申し込みは
新宿区東大久保二の一五五
世界労仂運動研究所内
戦旗経営局
定価 一部 十円
月 四〇円 半年二四〇円

岸資本家政府を倒せ

物情騒然たるゼネストで革命的情勢つくれ！

六・一一戦斗的国会デモを!!
六・一五ゼネストで参院通過を阻止せよ!!
全生産をマヒさせ岸を葬れ!!
岸打倒まで電車列車を動かすな!!

共産主義者同盟

全日ストでブルジョア秩序をマヒさせよ!!

（一）

六・四ゼネストで安保斗争はまつたく異つた段階に入つた。

六月四日、全国の列車ダイヤは大混乱し、日本資本主義の大動脈東海道線は、労仂者・学生のピケで断ち切られた。首都東京の電車は朝七時まで完全に動きを止めた。二時間余、ブルジョア社会は、その心臓部東京で運行をやめたのである。

全労・新生民同の右翼分裂主義者からの攻撃におびえ、「日本的組合主義」を唱えて政治斗争を放棄しようとしていた民同に指導権を握られながら、日本の労仂者階級は遂に空前の政治ゼネストに決起したのである。

労仂者階級は、単なる「岸へのにくしみ」で斗つたのではない。長年の合理化攻勢の中で労仂強化に日々苦しめられながら、つねにみずからの階級的力を爆発させることを防たげられてきたつもりつもつた怒りを爆発させたのである。

日本資本主義の壮大な合理化・〃才二の産業革命〃とともに進行するかに宣伝された「労仂運動の右傾化」は、労仂者階級が一度政治ストに決起する時、一個の幻影でしかなくなつたのだ。

五月末の全繊大会、全炭鉱中央委の動きは、全労の中にさえ、戦斗的労仂運動は生まれることを示唆している。

五・一九、二〇以来、小ブル中間層をまきこみ拡大に拡大を続けて、不断に政治的緊張をつくりだしてきた安保斗争は、六・四政治ゼネストで、今やあからさまな全資本家階級対労仂者階級の正面からの対決へと突き進んでいる。

（二）

だが、岸は倒れなかつた。のみならず敵階級は一層強硬に安保をおし通し、アイクを迎えようとしている。

何故か。六・四ストが〃整然〃と終り、一端停止したブルジョア社会の時計は、七時を期してふたたび正確に動き出したからである。空前の労仂者の盛り上りを前に、民同幹部は一層悪辣な裏切りを行つたのだ。

下部の革命的労仂者こそ、手をつくして斗いの爆発を抑えようとする民同幹部と不断に斗い〃組織の実態〃だとか〃下に力がない〃などの口実を与えぬ萬全の態勢をつくりあげた。この時彼らは一転して二時間の時限ストの完全遂行で、労仂者のエネルギーをこの中におしこめ、ブルジョア秩序を一歩もふみこえぬ斗争にしたのである。

六・四ストは、こうして〃整然〃と終つた。だが、もしも一ケ所ででも、民同の壁を破つてラッシュ時まで電車を止める斗争が生みだされたなら、労仂者の力は堰を切つてあふれ出し、〃整然〃としたストは、岸を打倒する〃騒然〃たるストに一変したにちがいない。

民同・日共は何よりもこれを恐怖した。だからこそ、反主流派学生と一般労組員で〃全学連防衛隊〃を組織するという破廉恥まで敢えてしたのである。

民同・日共は、遂にブルジョア支配を守る安全装置になり下つたのだ。

この〃安全装置〃をぶちこわし、民同・日共が青くなるような斗争を組織してはじめて、岸は打倒できるのである。その鍵は何か。それは唯一つ、革命的前衛が存在するか否か、である。六・四ゼネストはこの革命的前衛たりうるものはわが共産主義者同盟のみであることを再び示したのだ。

（三）

今こそ、一挙に岸を打倒し、資本家の本陣に迫らねばならない。

斗争は、総資本対総労仂の正面衝突として、ゼネストで全生産をとめ、ブルジョア秩序をマヒさせ、岸を打倒するまで斗いすすまねばならぬ。

革命的労仂者と改良主義者の対決点は「政治ストをやるか否か」ではなく、今や何を目標として、何時、どのような政治ゼネストを斗うかにある。

ブルジョア秩序に一指も触れることのない、静穏なストは、岸を打倒する力とはなりえない。労仂者は力でブルジョア秩序をぶちこわし、岸をうち倒し、資本家政府を倒すのだ。

〃整然〃と終つた六・四ストに力を得た資本家階級は一層強硬に危機をのりきろうとしている。彼らは、その階級的感覚で労仂者の力があなどりがたいことを同時に知り、今や全資本家階級が結集し、ブルジョア支配を守ろうとしている。警職法と異り、決して譲ることのできない安保批准をおしとおすために、彼らは才一に、安保批准、アイク訪日までは岸政府を守りぬき、才二に、その後に反対斗争を圧殺するため岸を退け選挙にもちこもうとしている。

だからこそ、岸は敢えて参議院単独採決を十六日までに企みが居ずまいをただしてアイクを迎えようとしているのだ。アイクの訪日の目的は、安保批准を確認し岸のテコ入れをするというまつたく政治的なものであることは明白である。

参院単独採決実力阻止、アイク訪日前岸打倒、これが勝利の鍵だ。

失地回復成れり、とした総評・国民会議は、十一日才二メーデー、国会請願、アメリカ大使館抗議、十七日才二波実力行使、十九日アイク訪日抗議行動、の方針を出した。

だが、この方針は、時と敵をずらした敗北の方針である。才一に、十七日では決定的に遅い。参院単独採決を拱手傍観するのか。参院単独採決の時点で岸を倒すのだ。十五日にゼネストで立て！岸打倒までストを続けよ！

才二に、岸打倒をいきにして、アイク訪日抗議斗争を語ることは、敵をそらし岸打倒をあきらめる、敗北の方針である。アイク訪日阻止で岸は倒れるのではなく岸を倒してアイク訪日をぶちこわすのだ。十五日—十七日—十九日と連続するストと大デモでブルジョア秩序をマヒさせ、岸をぶち倒し革命的昂揚の中でアイクを追い返すのだ。

十一日、岸はハガチーと会う。お祭のような〃才二メーデー〃ではなく、戦斗的国会デモで、参院単独審議を阻止せよ！岸にハガチーと会わせるな！

六・一五全日ゼネストで立て！国会を包囲し、自民党議員の登院を阻止し、単独採決を断じて許すな！全生産を止め、ブルジョア秩序をマヒさせよ！岸を打倒せよ！国鉄、全逓は断乎として全日ストに入れ！

大牟田の総評臨時大会は、下部からのつきあげにより十七日を十五日にくりあげた。裏切りの余地は一歩一歩せばめられている。だがなおも彼らは〃民間中心〃の名の下に、国鉄、全逓、全電通をストからはずそうとするにちがいない。一切の裏切りを未然にうち砕け！

全一日ストの体制を下からつくれ！

六・一五ゼネストが革命的に斗われるか否かは、日本の労仂者階級が「日本的組合主義」「全労化」の道を歩むか、革命への道を歩むかの岐路をなすものである。

進撃を開始した労仂者階級は、もはや民同の壁に満足することはできない。共産主義者同盟は、革命的労仂者の先頭に立ち、六・一五才二波ゼネストの革命的爆発のために、組織の総力をあげて斗う。

六・一一戦斗的国会デモ！
六・一五ゼネストでブルジョア秩序をマヒさせよ！
国鉄・全逓・全電通は、六・四を数倍する実力行使で立て！
交通、電信・電話、新聞・放送を中心に、全重要産業を一日中ストツプせよ！
参議院単独採決の暴挙を断じて許すな！
岸資本家政府打倒までゼネストを続けよ！
アイク訪日前に岸を倒せ！
岸の延命を助け、国際帝国主義者の支配を強化するアイク訪日反対！
アイク訪日を実力で阻止せよ！
六・一五ゼネストで階級的総攻撃の火蓋を切れ！

〃政治ゼネストはうてる〃

転機劃した六・四スト

列車・電車は完全にストツプした。都電・都バスも止つた。郵便もおくれた。

五・一九、五・二〇以来、燎原の焔のごとく燃えひろがつた憤激の頂点として斗われた六・四ゼネストは、戦後の階級斗争史上に輝かしい一頁をきざみこんだ。

民同〃失地回復〃か
六・四ストのパラドクス

十一・二七以降、口を開けば「整然たる」という言葉をやたらにふり廻してプロレタリアートのエネルギーの爆発をおさえつけてきた総評、国民会議、社、共などは、六・四ゼネストにたいし口を揃えて「整然たるスト」とほめたたえた。

また政府、自民党は「低調なスト」と評価した。低調といおうと整然といおうと労仂者階級のエネルギーはもはや何人たりともおさえつけることのできない状況になつてきている事を六・四ゼネストは教えている。

本年一月廿三日、大田、岩井、宝樹、野々山、安垣らの民同左派幹部なからなる労仂者同志会が「労仂運動の前進のために」という新方針を発表し、その中で、政治斗争は政党にまかせて総評は経済斗争に徹し、組織的団結をはかるという「日本的労仂組合主義」をもちだしてから半年もたたないうちに六・四ゼネストが経済要求をからませない純然たる政治ストとして斗われることにより、民同路線は破綻を余儀なくされた。「経済斗争に徹する」といいながら、春斗を斗わずして次から次へと妥結させ、労仂運動を右旋回させ、ブルジョアジーに屈服しつづけてきた民同指導は六・四ゼネストによつて破綻した。

安保斗争が始まつて以来、足掛け三年、その間、一貫して、「職場の弱さ」を理由に安保一本ではストはうてないと叫びつづけてきたことがいかにでたらめなものであつたかは、六・四ゼネストによつて余すところなく立証された。一九、二〇日を契機にして民同が変つたのか。流動局面のなかにあつて既成の指導部もまた成長したのか。答は否である。六・四にいたる経過とゼネストの状況がそのことを物語つている。

幹部のりこえ 労働者は進んだ

最初、総評は六月十四日にストライキを予定していた。五・二六から二〇日後に斗われるのではブルジョアジーに立直りの契機を与えるようなものだつた。政治情勢が流動化し、労仂者階級の憤激が日増しに昂揚していくなかで、それを抑えきれなくなつた総評民同はそのエネルギーを利用しながら民同路線の破綻をおぎなおうとし、十四日から四日に繰上げた。しかも斗争方針は六・四ゼネストによつて秩序を破壊するなかで岸を打倒するということではなくて、ストライキによつて世論を高めることが目的であつたのである。そのためには、整然たるストでなければならなかつたし、時限ストでなければならなかつた。世論の昂揚が目的である限り敵にたいする打撃は才二義的・副次的なものであり、それ故総評民同はたえず斗争形態を低めようとする努力を払つていたのである。彼らは最初全電車のストップを意味しない池袋、八王子、蒲田の三電車区の職場大会を予定していた。だが田町電車区青年部のストライキ指令要請決議にも現われたように下部労仂者は明らかに民同の枠をこえて進んでいた。

同盟のビラは奪うように読まれていき、国鉄労仂者の斗うエネルギーは到る処にみちみちていた。かかる中で国鉄中斗は全電車区に準備指令を出さざるをえなかつたし、指令をかちとつた下部労仂者は、新潟斗争以来おさえつけられてきたエネルギーを一挙に前進させていき、六月二日から乗務員確保に全力をあげ、ストライキを勝利させたのであつた。全逓の場合も同様である。全逓中央の戦術は二転三転と動揺を繰返し、中郵のスト突入を最後までためらつていた。国労と並んで全逓中郵が突入するか否かは、それが首都東京のど真中で斗われる以上、決定的な意味をもつていたし、それを支えたのは、民同指導の枠をのりこえた全逓労仂者の斗争であつたのだ。

民同・日共は 資本家の安全装置

「国民に支持された整然たるスト」と社会党、共産党はストの成果をほめたたえている。そして大学教授、文化人、俳優、商人、中小業者などの中間層が動き、無関心層が急激に少なくなつたことを彼らは誇つている。彼らは安保斗争が始まつて以来、一月以降の決定的段階においてすら無関心層の獲得が斗いの重点だと叫びつづけ、生産点実力行使を背景とする国会デモを、ネグり、署名と請願にエネルギーを分散させてきた。労仂者が斗いの舞台におどりでてくるや否や共産党は、ジグザグデモを「みこしかつぎ」だといつて攻撃し、国民会議もまたすべての国民が参加できるためにとジグザグデモをおさえつけた。そして六・四ゼネストにはたしかに従来になく圧倒的多数の中間層が斗いの舞台に登場した。では社共の方針が正しかつたのか答はやはり否である。なぜならば、無関心層の獲得を叫んで署名と請願に血道をあげていた際、一体どれだけの中間層が斗いの過程の中にくりこまれてきたか。中間層は署名の繰返しによつてではなくて、五・一九以後の流動化した情況のなかでのみ始めて斗いの過程に登場しえたのである。それが斗いの論理であり、事物の弁証法であつて、無関心層の獲得を斗争の重点にしたことが正しかつたと云うことは自らの日和見主義を合理化する以外のなにものでもない。

六・四ゼネストは下からの激しいつき上げによつてのみかちとることができた。だが「整然たる」という言葉が示す通り、岸に打撃を与えるものではなかつた。一方では全労、民社党の右からの攻撃、他方では斗う下部労仂者のたえざる左翼化の前に次才に足もとがくづれてきた総評民同は、再び労仂運動における自己の支配を安定させるべく、六・四ストを「失地回復」に利用したのである。その上共産党は再び裏切り者として登場してきている。五三年四月選挙の国民政府＝重光首班という歴史的にも破産の証明ずみのスローガンを再び古鞄のなかからとりだし社会党の議員総辞職に反対し、自民党反岸派も含めた選挙管理内閣を提唱しオール国民戦線の結成提唱がすなわちそれである。それは西尾一派にも劣らない資本にたいする安全弁であるだろう。

そして社会党も共産党も、国会解散・総選挙の方向に斗争をしぼり、労仂運動・大衆斗争をそのための手段と化そうとしていることは、流動局面を小ブルジョア的に収束せんとする以外のなにものでもない。

六・四ゼネストは、労仂者階級が政治要求をもつて起上ることが全く可能であることを立証した。だが反面それが「整然たる」行動のなかにおしとどめられている限りそれだけでは岸を打倒できないことも教えている。そして早朝時限ストではない、十五・十六・一七の連日ゼネスト、それのみがブルジョア秩序をマヒさせ岸資本家政府を打倒することができることを、六・四は教えている。いまや民同、社、共の思惑をのりこえて前進することのみが勝利の鍵である。

電車完全ストップ

〃整然〃の陰にカウッ積

六月二日には、「岸内閣打倒」「六・四職場大会をかちとれ」と横腹に大きく書きつけられた準急電車が東海道をつつ走つていた。当局が必死になつて消したあとがみえるが何が書いてあるかは一目瞭然だつた。そしていたるところで公安官との間に乗務員確保の死斗が繰りひろげられる。六・四ゼネストは、こうした中で幕をあけた。

七十六単産四百六十万の時限スト、戦後最大の規模に達したのである。

六・四ストの中核は、国鉄全逓労仂者の闘いであつた。国労、動力車労組は強力な共斗のもとに、札幌、名古屋、岡山、広島など十三機関区、操車場、車掌区客貨車区に於て圧例的なストライキに成功し、京浜地帯では尾久、品川、東神奈川、蒲田など十八電車、機関区とも殆んどの乗務員を確保し、七時まで電車は完全に止つた。

〃世論のうけ〃を気にする敵階級に対する打撃よりも総評、日労幹部は、ストを「整然」と終らせるために全力を傾注し、東十条、尾久、品川の構内に座り込んだ全学連三千名の学生をゴボー抜きする指令さえだしたが、斗う下部労仂者に無視された。

線路上に坐り込み 札幌、名古屋

特に、札幌、名古屋、大垣、広島では数千名の労仂者、学生が線路上に坐り込んで列車をとめるというあきらかに、民同がおしつけたワクを踏み越え、資本家をふるえ上らせる革命的な戦いを行つた。広島、白市駅では、駅長が労仂者のカンヅメに会い、駅は丸三時間完全に労組の支配下におかれた。千葉津田沼では、百名余の警官隊が、くらやみに乗じピケ隊におどりかかつたが、固いスクラムを組んだ労仂者の反撃にあつて、すごすごと引き返さざるを得なかつた。

一便止める

全逓中郵

全逓は、全国四十九局の二時間職場大会で戦つた。東京中郵が戦いの中心になつた。ここでは、当初、全逓幹部の陰謀によつてストから除外されようとしたが中郵青年部の強硬な突きあげにあつてやつとスト指令がおり、二百名の青年行動隊が前夜から泊り込みで待機した。

午後十一時、支援団体の先端を切つて一千名の東大、中大などの学生がかけつけ紙吹雪の中で、盛大な決起大会が行れた。この全逓中郵のスト支援に座り込んだ労仂者、学生の数は五千名にのぼり、電車のストップで人通りの絶えた東京駅丸ビル街近辺でここだけが活気にみちみちていた。

〃次は日本か〃

欧米各国に衝撃 全学連官邸突入

全階層にさきがけ安保斗争にとり組み先進的に斗つてきた全学連は、三日午後から四日にむけ最も戦斗的な斗いを行つた。七千名学生による国会デモー首相官邸突入ー夜間決起大会ー国労前デモー国鉄のゼネスト防衛ー再び国会、官邸突入デモ。中でも三日午後の官邸デモは、西独才一のディーウエルト紙で「東京で市街戦」とトップ見出しの写真入りで報道され、〃次は日本か？〃と世界ブルジョアジーを驚愕と恐怖のドン底につき落した。

◆ ◆ ◆ ◆

週刊化にともなう

発行日と紙代変更について

前号にて予告した通り、全国の革命的労仂者、学生、インテリゲンチヤの熱望に応えていよいよ本号より週刊化を断行することになつたので、それにともない、発行日ならびに紙代を次の通り変更します。

一、発行日…毎週火曜発行（前号にて日曜発行としたのを訂正）

一、紙代…一部売り従来通り十円。月極購読四〇円（郵送六〇円）半年分二四〇円（郵送三三〇円）但し前金納入の読者はすでに納入してある分のみ据置きとする。

一、振替口座を新設したので、以後、経営局への紙代送金は原則として振替を使用すること。（現金書留その他の使用はなるべくやめて下さい）

振替口座番号東京一二一〇四番

事務所移転通知

印刷所を拡大し、戦旗発行業務を機動化するため事務所を左記の場所に移転したことをお知らせします。

新宿区東大久保二ノ一五五・世界労仂運動研究所内・電(三四一)八四八一

一九六〇年六月八日

戦旗編集局
〃 経営局

祝 戦旗週刊実現

印刷の御用は
雄正社へ
新宿区東大久保二ノ一五五
(三四一)八四八一

本の御用は
リベラシオン社へ
千代田区神保町二ノ四
(三三一)〇九七九

告 編集部

次号十七号は、『安保闘争』特集とします。

赤雷

★社会党臨時大会は萬雷の拍手の中で議員総辞職を決定した。議会主義の党としては最高の戦術だともいえる。勿論国会を解散し社会党の議席をふやすという作用が仂いていることは事実だろう。★共産党は早速野坂議長談話を発表し、反対の意志を表明した。「国会を捨てることになる」というのがその理由。自民党のいい分によく似ている。それもその筈社会党議員が議会から引揚げてしまうと共産党には困つたことが起るからだ★首脳会談決裂以来旧スターリン主義への復帰が云々されているが、日共はますます右に傾いている。「反岸派を結集する選挙管理内閣」がその代表的なもの。この内閣をつくるためには社会党がいなくては御破算になつてしまう以上、反対するのも無理もない。★「民族解放民主政府」「国民政府」「反吉田 反再軍備 政府」「民主的政府」と日共は十年間、政府スローガンを色々もちだしてきたが、いつも右翼的産物の代表みたいなものだつた。「選挙管理内閣」もその例外ではない★竹内好と鶴見俊輔の辞職、社会党の総辞職。このなかで一発騒然たるゼネストをやれば、混乱は必至。ブルジョア民主主義はマヒさせ秩序を破壊する行動なら、なんでもやることが今は必要！ゼネストを忘れさえしなければ。

印刷所カンパ

拡大移転に着手！ ピッチをあげよ!!

共産主義者同盟 中央書記局

全国の同盟員諸君！
革命的労仂者諸君！
印刷所拡大カンパを集めているか!!
何人にカンパの訴えを行つたか!!
集めたカンパを戦旗経営局に送つたか!!
全国の同志諸君！
革命的労仂者諸君！

われわれの労仂階級解放の事業、そのための一切の既成社会秩序の徹底的破壊と、その転覆粉砕という仕事は、他のどんな勢力からも決して支援されはしない。すべての資本家、政府、官憲、労仂貴族、日和見主義者、改良主義者からの公然陰然残忍な圧迫を排してすすめられるのだ。そして、労仂者階級の戦列の中からさえ、意識的無意識的な妨害が行われるのを、すべて勘定に入れて斗争をすすめねばならないのだ。

だとすれば、わが同盟の数百萬大衆獲得の武器労仂者印刷所の拡大をわれわれ自身がおし進めなくて誰がやるのか。

われわれが頼るべき資金源は、貧苦にうちひしがれ、その日の食にも事欠く無産大衆の自己犠牲的行為のなかにしかない。

西尾一派は本物のブルジョアから、総評民同はブルジョアと労仂貴族から、日共はモスクワ、北京官僚からその老大な物質力を生み出しているとしたら、わが同盟は、十五円の豆腐を十円の納豆に代え、パイプで吸殻を吸つてタバコ銭を浮かす労仂者の零細なカンパを組織しなければならぬ。斗争の武器が必要とあれば、そしてそれが解放の斗いをす、めるとあらば、労仂者は喜んで衣食を節してこれに応ずる。

労仂者同盟諸君！
革命的労仂者諸君！

すべての労仂者に、革命的大衆に、公然とカンパを訴えたか??

今月の給料とボーナスから、君はどれだけ拠出できるか??そして、仲間の労仂者から予約をとつたか??支給日に几帳面に集金に行くかまえはできているか？

学生同盟員諸君！
革命的インテリ諸君！

十円の金に事欠く状態だからカンパなどとてもなどと云つていはしないか？ だが君の周囲を見廻してみろ。両親、兄弟、同級生、先輩、後輩知人のあいだでカンパを組織できないか？十円の金はできなくても千円、五千円の金ができる方法は、いくらもあるではないか？

現在、全国各地から印刷所拡大資金は着々と中央に寄せられ、六月五日現在で二三萬三七四二円に達した。同盟書記局は現在迄に集計された資金の総額と、今後数日内に寄せられるであろうカンパの額を見越して現在の約五倍の規模の印刷工場への移転の実現を完了した。

印刷機については、左のような種類の物の購入を予定しており、印刷所の移転拡大が完了したので今後のカンパはこの購入にあてられる事になる。

★ストツプシリンダー式四六八頁活版印刷機
★印刷能力・戦旗一頁の大きさを毎時二〇〇〇枚
★価格・四五萬円
（ワラ半紙半分の大きさのビラなら一時間に八〇〇〇枚刷れることになるのだ）

現在までに集計されたカンパは、その殆どが同盟外の革命的労仂者、インテリ大衆からのものであり、同盟組織から送られてきたものは極めて僅かである。これは一体どうしたことか??

同盟外の革命的労仂者は、戦旗の日刊化とそのための印刷所拡大を切実に望んでいるのに、わが同盟員はその必要を認めないということなのか??

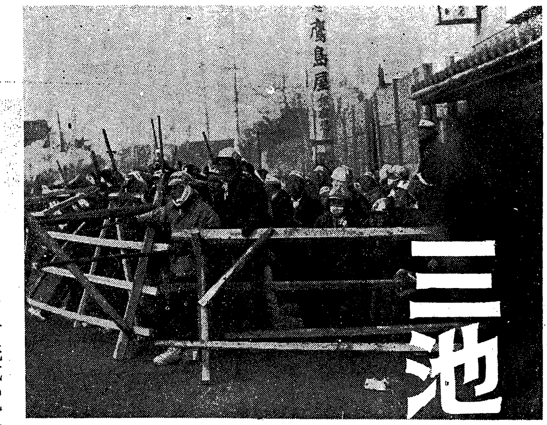
そんなバカなことはない。

組織として、カンパを遂行するにはそれ相応の独自の体制が必要である。各細胞、地区委員会、地方委員会は、戦旗責任者をカンパの責任者として直ちにカンパに着手せよ。カンパ趣意書等は必要に応じて中央に請求せよ。

カンパ集計（六月五日現在）

東京A細胞 〃B 〃C 〃D 〃E 〃F 〃G 〃H 個人A 〃B 〃C 〃D 〃E 〃F 〃G

三六二〇 五七二 一二五〇 九五〇〇 二二五〇 三二〇〇 一一一五 一一一五 九六〇 三五 五〇〇〇 九七〇〇 六〇〇〇 二一四〇〇 六八四〇 二〇〇〇〇



三池と革命

「三池は重要だ」と誰しもが叫んでいる。民同も、社会党も、共産党も、労仂運動を語るすべてのものが口にしている。三池で敗れれば、炭労十一万の首がとぶと、炭労がつぶされると。それはそうだ。三池の労仂者は生命をかけて斗つている。そこで毎日激突がつづいている。だが合理化の本質と斗争の展望についてては今日に至るも混乱がつづいている。まして三池の斗いをプロレタリア革命の明確な展望のもとに位置づけることなど既成の指導部からは一言も語られることはない。三池斗争とはなにか。三池の闘いは日本労仂運動になにをもたらしているか。

闘いの経過

一九五九年
1・9、三井資本才一次合理化案（六千の首切り）を提案
3・2、企業整備に反対し3月23日まで二四時間、四八時間、七二時間、無期限ストに入る。
4・6、希望退職を認めることで妥結。
5・2、遠藤分会長の不当解雇に反対し一時間五十分、二四時間スト
8・28、才二次合理化案発表、全山四、五八〇名、三池二、二一〇名
8・26～29、総評才十二回定期大会、炭労支援の労金預金千円を決定
9・5、石炭協会「三八年度までに炭労十万名の首切り」計画を発表
10・5～7、炭労臨時大会
10・7、三井と三鉱連団交決裂
10・16、日経連臨時総会、前田専務理事、全資本家の団結を訴える
11・7、組合、「生産体制に協力、指名解雇は認めないが、希望退職には応ずる」と会社に申入れ、会社は拒否
11・19、20、総評臨時大会炭労支援に年内百円、一月以降五十円のカンパ
11・21、中山中労委あつ旋案
12・2～4、会社は約一五〇〇名に指名退職勧告
12・8、組合勧告を返上
12・11、会社、一二七七名に指名解雇状を発送
一九六〇年
1・7、団交決裂
1・25、会社、ロックアウト強行、組合、全面ストに突入
2・15～18、炭労臨時大会三池支援の六百円カンパ決定
3・1、三社連六百円カンパ拒否
3・11、批判勢力を名のる中央委員ら六九名署名して中央委員会開催要求
3・12、三田村教室開催
3・15、緊急中央委員会、批判分子退場、刷新同盟結成、会社側生産再開準備
3・17、刷新同盟が才二組合を結成
3・18、三社連炭労脱退、新組合を支持
3・18、才二組合会社と団交
3・24、才二組合員へロックアウト解除、才二組合全労支援要請
3・27、会社、才二組合へ就業命令書郵送
3・27、炭労中斗戦術転換中労委にあつ旋申請
3・28、会社、才二組合、生産再開強行、乱斗
3・29、ピケの固さに会社就労できず、久保清殺される
3・30、会社、ろう城を準備
4・6、藤林あつ旋案ださる、三池中央委員会あつ旋案拒否、会社側あつ旋案受諾
4・8、炭労臨時大会、才二組合才二人工島より強行入構、炭労中斗あつ旋案をめぐり動揺くり返す
4・17、炭労大会、あつ旋案拒否にきまる
4・18、三川鉱強行入構
4・21、炭労現地指導委員会発足
5・3、石原国家公安委員長大牟田入り
5・4、福岡地裁、執行方法ならびにホッパーについての仮処分
5・6、仮処分執行のため執行吏来る
5・12、再び激突、警官隊と衝突
5・15、16、総評評議員会長期に斗うためのカンパ決定

特集

石炭合理化と日本資本主義

"政策変更 の斗い"——炭労・総評は三池斗争を中心とする合理化反対斗争の目標を次のように要約している。

「——以上述べたことくわれわれは答申案（註・石炭合理化審議会答申案）の反動性と反国民的性格を明らかにするとともに、労仂者が心から協力できる石炭産業の進歩的発展の途を講ぜられるまで妥協のない斗いをすすめる決意のあることを表明する」（五八年十二月十九日、中間答申案に対する炭労の声明書）

ここには、合理化反対斗争をどう斗うか、の問題点がこの上なく明瞭に示されている。「労仂者が心から協力できる」合理化などが資本主義社会であるのか？すでに数多くの労仂者の血を吸い、力がすべてを決する鋭くとぎすまされた局面を進んでいる三池斗争に石炭合理化に対する斗いは集約され、同時に今すべてを圧しつぶしつつ音をたてて進む全産業をおおう才二次合理化の波に、労仂者階級がどう斗うか、の一切の問題が集約されているのだ。

石炭産業"斜陽論"の欺瞞

"今日のエネルギー革命の時代に石炭産業斜陽化は宿命的だ。だから合理化・首切りは石炭産業が生きのびるためにはどうしても必要なのだ"——これが炭労労仂者に首切りをおしつける資本家の論理である。

石炭が最近数年の間に、石油、電力の競合エネルギー産業に急迫されおびやかされているのは事実である。

四九年から五一年にかけての石炭統制撤廃、石油企業の外資導入、電力再編成によるエネルギー産業の自由競争の開始と、五五年以後の才二次合理化の急速な進行と共に進んでいる。化学工業におけるアンモニアガス源の天然ガス・重油分解への転換は、東洋高圧大牟田工場のコークス法廃止による三池合成の解散、三井の宝庫大牟田石炭＝化学コンビナートの解体として劇的に進行している。電力における火力発電所の重油専焼傾向、鉄鋼・セメント等での発生炉ガス用炭の重油転換、はては豆腐屋から風呂屋まで天然ガス・重油ボイラーへ移行しようとするなどの動きは、石炭資本を他エネルギー資本との競争において決定的窮地に追いこみつつある。だから、石炭資本は、今抜本的合理化を行うことが焦眉の課題にされているのだ。

だがそれは、石炭資本のいうように、日本の石炭はもう堀りつくした、とか、固体の石炭と流体の石油・ガスのエネルギー源としての自然的有利性によるものとはいえないのである。

明治初年、政府の手で開かれた九州の炭鉱は、廿年代初め、三井（三池）、三菱に払下げられた。二大財閥は以後この優良炭鉱の独占の上にその全日本的支配を確立していつたのである住友・古河・明治にしても同様であつた。

これら石炭独占資本は、大鉱区独占により鉱山地代を自らの手に納め尨大な超過利潤の一部とし、更に国家権力と結んで国内エネルギー市場を石炭で排他的に支配し価格をつりあげた。そして中国侵略の開始とともに低廉な大陸炭との競争が日程にのぼるや、昭和八年昭和石炭、同十五年日本石炭と、厳重な販売カルテルを結成して独占価格を維持した。こうした独占の上に、石炭資本は、生産性の上昇によつてではなく、もつぱら低賃金労仂の搾取によつて資本蓄積を進めたのである。日本資本主義の確立により独占の地位が安定し産業予備軍が形成されるや、明治卅年代の大立抗方式は、より生産性は低いが設備費が安く低賃金労仂の搾取には有利な斜抗方式にかわつた（これは現在まで基本的には変つていない）

こうして、国家権力と結びついてエネルギー市場を独占した石炭資本は、大独占資本の床柱となりながら生産力拡大のための近代化設備投資を拒否しつづけて今日に至つたのである。

だが、帝国主義的市場競争戦が開始された世界的"自由化"の中で、こうした石炭資本の寄生性と腐朽性は、日本資本主義のガンとなつた。生産性の低さと市場独占による高炭価は、不変資本部分に占めるエネルギーコストを高め利潤率を圧迫し、壮大な才二次合理化計画の要求と衝突しつつある。諸産業資本の石油・ガス・電力への一斉のエネルギー転換はこうして現実となつているのである。

ここに至つて石炭資本は根本的合理化によるコストダウンを迫られているのである。

"対米従属"論の誤り

このように、石炭合理化は、日本の石炭資本の、否日本資本主義そのものの独特の矛盾が、「海外競争力強化」という至上命令の前に鋭く現れたものに他ならないのだ。

総評・日共のように、これを"対米従属のエネルギー政策の結果"であるとし"政策転換"を要求することは、合理化反対斗争の方向をそらし、改良主義の泥沼にひきずりこむものである。

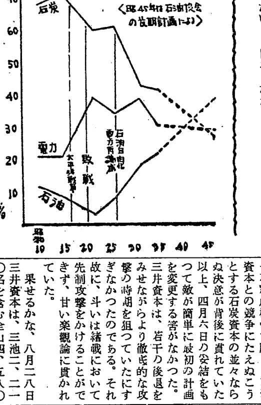
たしかに七大会社によつて石油の世界的独占が完成しており、米軍の占領下にあつたという条件の中で、戦後大規模な石油産業を興すに当つて五〇％株式取得をはじめ、外国資本への依存は不可避であつた。だがそれは、単に日本ブルジョアジーの対米従属政策の結果、というよりは、戦後のアメリカ帝国主義の圧倒的優位下でどの資本主義国にも共通にみられたことだつたのである。数年来の"自由化"の進行、石油の供給過剰傾向で、事態は変りつつある。五二年七月に至つて石油が完全に自由化して以来、原油供給源は北米からアラビアへ、更にクウエイトへと移行し、石油価格が低下する傾向の中でも政府はむしろ一貫して石炭産業保護政策をとりつづけてきたのである。重油ボイラー規制法はその典型的なものである。一般の個別産業資本にとつては、石炭保護政策の撤廃こそがエネルギーコスト切下げのために要求されていたにもかかわらず。問題は、国際的石油資源の開発の進行・輸入石油の供給過剰化・輸入石油の重質化などに伴つて、石油の有利性が明白になるにつれて、石炭産業保護政策が限界にきているところにあるのだ。

合理化反対斗争に妥協はない
―政策転換は改良主義―

現在の合理化攻勢は、明らかに四九年、五三―四年のそれと異つている。それは単なる非能率鉱山の閉山に止まるものではなく、より根本的なものである。

"抜本的合理化"計画は、炭鉱労仂者の一層苛酷な搾取と炭労の破壊の上に、自らの再生強化を計ろうとするものである。トン当り千三百円の値下げ、そのための非能率炭鉱の閉山と高能率炭鉱への生産集中を中心とするスクラップ・エンドビルト政策は、抗内外設備の集約化・新鋭機械設備の導入などによる生産性の上昇を優良高能率鉱で集中的に行おうと意図している。だが、同時に十万人の首切りによつて生じた尨大な炭鉱失業者群を低賃金労仂力のプールとし、臨時夫、組夫を増し、中小・租鉱権炭鉱を拡大しようとしているのである。

この合理化が、一方では労仂条件を極度にきびしいものにし、他方では苛酷な低賃金労仂を一層広凡に復活することは明らかである。日経連の前田が「一業種の問題として放置せず、全産業の問題として関心を持つべきであり」「その処理に失敗すれば、わが資本主義体制に動揺をきたすおそれがある」と指摘するようすに石炭合理化は全ブルジョアジーの問題なのである。



彼らにとつて、旧態依然たる独占支配に安住して寄生性と腐朽性を強めつつある石炭資本にエネルギー源を求めることは危険になりつつあるにもかかわらず、才一に石炭合理化によつて、石炭が石油・ガス・電力と価格競争を展開して互にコストを引き下げ合うことは彼らにとつて利益でもあり才二に日本資本主義に重要な位置を占める石炭資本が合理化によつて再生強化するならば、日本資本主義の強化をもたらすものであり才三に、この合理化の中で日本労仂運動の最精鋭炭労を破壊することは、才二次合理化を全産業に亘つて遂行し、「経営者時代」を実現する鍵なのである。だから資本家達は石炭資本はダラシがないと白眼視しながらも三井に協調融資をおしまず、日経連タイムスが、各号三池斗争でトップをかざるのである。

石炭合理化をめぐる労資の戦斗は、全産業に及ぶ才二次合理化をめぐる決戦の死生を決する緒戦である。三井三池の斗いにそれは集中されているのだ。

合理化反対斗争に妥協はない。三池の斗いは、このことを全労仂者に示した。危機の真の原因が政府の誤つた政策にあるのではなく資本主義そのものにあるのだとすれば、政策の転換で労仂者への攻撃を砕きうるとするのは改良主義である。

激突を避けるな!! 三池斗争
会社側近く强行突破策す

安保斗争をめぐる中央の政治情勢の緊迫化に伴い、三池は、一時新聞紙上からなりをひそめていつた。「モグラどもは殺すぞ！」とピケに棍棒をふるい、民家に土足で踏み上り、主婦を捕え、通りすがりの労組員をこずいたり、斬り捨て御免の暴れ方をしていた警官隊も、五月十九日夜の国会クーデター以来派手な行動を差し控えている。現在三池には大波乱もなく一種の「安保待ち」の静けさが継続している。しかしそれは、あくまでも嵐の前の静けさである。会社側は着々と攻撃の準備を行つている。五月十日に開かれた三月期決算取締役会において、三井鉱山は実質約十九億円の赤字を計上し、前年九月期よりの赤字繰り越し四十一億円と合せて、合計六十億円を上廻る赤字決算を行つた。すでに五十億円の協調融資を食いつぶしているが更に、銀行グループから十三億二千萬円、新昭和石炭を通じ大手石炭十七社から四億円の融資取りつけを行うのに血眼になつている。争議長期化による市場攪乱は大牟田地区関連産業への石油進出と工場移転など景気がよい時だけに会社側の痛手は極めて大きい。会社側が早期解決を切実に期待しているのは事実である。五月十一日、栗木社長は、「山野、田川から二二〇〇名を三池に導入し、約七五〇〇名で三池理想の日産一萬五千トンを実現する（一人一月あたり五十トン、現在は六トン）」と強気の談話を行つている。又、五月三十日の株主総会でも「既定方針通り、才二次再建案はあくまで遂行する。そのためには、争議の長びくのはやむを得ない」と長期斗争の不退転の決意表明を行い、了承を得た。会社側の才一の攻撃目標はホッパー、ベルトコンベアーの確保、運転である。ピケ隊の排除強行を禁じた五月四日付の地裁決定を不満として、控訴を行い、日経連機関紙を筆頭に、「暴力ピケやめろ」の大宣伝活動を行つている。五月二十五日の最高裁嘉穂事件判決は、「スクラムで押し返すのは違法」「ピケは平和的説得に限る。」と従来のピケ規制を二歩も三歩も押し進めて、ブルジョアジーによる院外のキャンペーンに迎合した。六月一日、石炭搬出のためのど元である港務所から労組員を排除するためにロックアウトを決定し、立入禁止の仮処分を申請した。ホッパー、ベルトコンベアー確保による石炭搬出に続いて、ピケ隊の通用門からの排除による自由通行権獲得、才一組合員切り崩しとかれらなりに必勝めざして攻撃の機をうかがつている一方、三池労組の方でも、ロックアウト後四カ月の斗いを通じて、斗志は高まり下部のエネルギーははちきれんばかりである。最近にいたつて、才二組合に走る者は殆んど途絶え、オルグ逆オルグの交流、支援カンパの強化により、落付きを示してきた。総評、炭労は、こうした情況を見て、情勢は有利になつてきたとして、六月九日に大牟田で総評臨時大会を開き、支援カンパの継続による追い込みをはかろうとしている。炭労本部を中心とする現地指導部も"会社側は追いつめられ、あせり出した。勝利まで後一押し、そのためには短期決戦を迫る会社側のペースにまき込まれないように、炭労才二五回臨時大会で確立された「長期柔軟」の態勢をくずさず、ねばり強い斗いを展開する。「力関係からしてピケを解くこともありうる。」（炭労才三回大会、当面の方針）会社側が、一時的に生産を再開し、石炭の搬出に成功しても、坑内夫、とりわけ採炭夫が少いため大したことはできまい。団結を強化し、組織を守り、才二への流の出を阻止できればいつかは勝つ"という見通しを立てている。それ以上の具体的見通しはいまのところ持ち合せているようには見受けられない。極めて他力本願的な方針である。確かに「何んでも決戦」一方式には一定の危険が伴う。ホッパーをとられたらもうお仕舞いだという敗北主義が生じないような配慮が必要である。カンパを集め、長期斗争に耐えうる体制を確立することも、勝つためには、絶対に必要である。だからといつて「長期柔軟」が固定化し、「無理は避ける」「挑発には乗するな」ということで、一方的な後退戦に終始し、斗いを回避していたならば、斗いの構えがなくなつて仕舞う相手の一層の攻撃を助長するだけだ。改良主義者による斗争指導が殆んど斗わずして敗北を契して仕舞うのはこのためだ。勝つためには、激突も避けない。戦うべき時はどんな犠牲を払つてでも戦うという構えが絶対に必要だ。それだけが敵の攻撃を阻止することができる。

闘争日誌
三川　くさの・じん

広場に座つて話しながら
地面に書く「資本主義」
——今日から俺は仕事ができない——
一片の紙切れだけで
首を切り
入門を拒み
昨日までの仕事を奪い……
——こんな世の中がつづいてたまるものか——
「資本主義」は
冷こく、非情！
だから
今日　仕事をしている仲間たちも
首の不安がつきまとうのだ
この怒りと不安がひとつになつて
首切りを撤回させる！
平和な世の中をつくる！
——大きい闘いなんだ——
×　×　×
今日　俺は
「資本主義」を
はつきりとみた。

転機の鍵にぎる三池
―組織論に逃げる民同―

「日本最強をほこつた三池労組において斗争の最重要段階に才二組合が発生したことは日本労仂運動の根本的宿痾を物語るものである……企業組合とはどの組合でも才二組合の潜在的可能性があり、極端にいえば経営者や当局はこれを顕在化させる条件をこの手に握つているともいえる」と一九六一年度総評運動方針案要綱はのべている。かつて英雄なき一一三日を斗い、日本労仂運動の中核である炭労の支えともなつてきた三池。そこでロックアウト後、二ケ月を経ずして才二組合が発生したことは労仂運動内部に深刻な問題をなげかけた。そして才二組合の発生の根源を企業別組合に求め、「日本労仂運動の根本的宿痾」だとする理論は、民同組合に恰好の理論的武器を与えた。たしかに「日本の労仂組合は従業員即組合員という全員一括加入組織ですから才二組合の潜在的要素はどこの組合にもある。」（三池労組発行パンフ「現地の実状はこうだ」）ということは共産党の「三池でも現状のような分裂をゆるしたのは社会党のセクト主義にあり」社共の統一が確立されていないからだ（高原晋一、前衛六月号）という無意味に近い言辞よりは的をついているようにも思える。だが、「日本労仂運動＝企業別組合＝才二の発生」という図式をいたづらにも遊ぶ時それは自己の指導方針の破綻と敗北主義をおおいかくすかくれみのとなる。斗いが敗北するのも、強力な斗争が組めないのも組合員が企業意識にとらわれているからであつて指導部の問題ではないと。そこから導きだされる帰結は、総評運動方針案要綱がのべているように五年間を目標に企業別から産業別に転換させることを日本労仂運動の当面する中心にすえるということでしかない。それは十年間にわたつて日本労仂運動を支配しつづけてきた総評民同の指導が、日本資本主義の新たなる局面のもとにおいて完全に破綻していることをかかる組織論によつてきりぬけようとする意図を明瞭に現わしているものである。昨年末、総評を始めとする民同系組合が組織綱領の問題に異常な熱をあげ始めた理由もここにある。だが、三池の教訓は企業別か産業別かという形式論理でかたづけられるものでは決してない。

三井資本が才一次合理化案を提案して以来約一年半、ホッパーの死守を焦点に激しい攻防戦を展開している今日にいたるまで、三池の斗争はいくつかの局面をへてきた。才一次合理化案（六千名の首切り）にたいする斗いは、二四時間、四八時間、七二時間、無期限とストライキに突入したにもかかわらず、四月六日、希望退職を認めることで妥結した。それは、明らかにブルジョアジーの意図にたいする全くの過少評価であり炭労をつぶすことにより日本労仂運動を右旋回させる狙いを全く理解してないことからくる譲歩であり、妥結であつたのである。五七年には国労が、五八年には日教組が、敵の攻撃の正面にさらされ、労仂運動右傾化の先頭となつた。才三の攻撃が炭労におそいかかつてくることは必至であつた。し、十萬の首切りによつて「石炭危機」を脱し、石油資本との競争にたえぬこうとする石炭資本の並々ならぬ決意が背後に貫れていた以上、四月六日の妥結をもつて敵が簡単に最初の計画を変更する筈がなかつた。三井資本は、若干の後退をみせながらより徹底的な攻撃の時期を狙つていたにすぎなかつたのである。それ故に、斗いは緒戦において先制攻撃をかけることができず、甘い楽観論に貫かれていた。

果せるかな、八月二八日三井資本は、三池二、二一〇名を含む全山四、五八〇名の首切り、賃金ベース切り下げ、人替採用の廃止など才二次合理化案を発表ついで九月に入り、石炭協会は「昭和三八年度までに炭鉱労仂者十萬名（うち大手七萬）の首切り」計画と高能率炭坑中心に石炭産業を再編成するという石炭産業合理化案を発表。さらに十月には日経連臨時総会が開かれ、衆知のとおり前田専務理事は「もしこれに失敗すればわが国の資本主義体制に動揺をきたす」と全ブルジョアジーを激励、彼らの意図が奈辺にあるか誰の眼にも明瞭になつてきたのだつた。炭労、なかんづく三池の合理化反対斗争が安保とならんで階級斗争の最大の焦点となつたことは争うべくもない明白な事実であつた。

それは、十一月、①人員整理は希望退職で行う。②生産阻害者は排除するという中労委中山あつ旋案がだされた時、三井資本はそれを拒否し、なんらかの役職にある組合活動家六七六名を含む一五〇〇名に及ぶ指名退職勧告を通知したことの中にも明白に立証されていた。ブルジョアジーは明らかに資本の牙をむきだしにさらけだしながら、全物量を三池に投入し始めていたのである。それ故に、日本労仂者階級は、緒戦における妥協と日和見から訣別し三池労仂者のストライキを軸に、階級的総反撃をもつて資本の意図を粉砕してしまわねばならなかつた。

十月五―七日の炭労才廿三回臨時大会、十一月十九―二〇日の総評臨時大会はたしかに緊迫してきている三池の情勢にたいして重大な関心を払つた。そして炭労大会は、「斗争体制の確立が十分でなかつたことを認めざるをえない」と指摘し、①企業整備の本質と背景についての意志不統一、②石炭産業の現状についての意志不統一、③そのため斗う方針が組合員の実態になつていないことについて討議を行つた。だが、斗いの展望は、長期政策委員会の報告通り、政策転換にすべてをかけ、三池斗争を軸に全炭労のストライキをもつて統一斗争を組む具体的戦術は決定されなかつたし具体的戦術を大会で委任された戦術委員会は、資本の意図するものが極めて露骨になつていたこの時期に再び戦術後退をもつて下部労仂者に応えたのであつた。大会後、会社側の団交再開の申入れに応じた炭労中斗は、十一月に入ると「生産態勢に協力する」「指名解雇は絶対にみとめないが、争議が円満に妥結したならば、その後の希望退職はみとめる」という案を提示し、後退につぐ後退を行つていつたし、総評臨時大会も、階級的総反撃としての斗争方針を全労仂者階級に提起するのではなく、年内百円一月以降五十円のカンパをきめただけであつた。斗う方針が確立せず戦術後退を行つていることを資本家は見落す筈がなかつた。それ故に、指名解雇、一月に入つてのロックアウトと一挙に勝敗を決せんと三井資本は攻勢にでてきたのであつた。

展望ひらけ

五二年の「英雄なき百十三日」の当時とは、企業整備の本質は明らかに異つており、ブルジョアジーは並々ならぬ決意をもつて臨んでいる。そして日本帝国主義の対外膨張と海外進出、その国内的基礎としての労仂者階級にたいする全面的攻撃にたいして、社会主義革命とプロレタリアート独裁を明確に対置させ、その下に日本プロレタリアートを結集すべき階級的指導の方針とそれにもとづく団体的戦術、全生産点におけるストライキ斗争の決起こそが、まさに五九年後半に要請されていたのであつた。そしてそれ以外にプロレタリアートが資本の攻撃から抜けだすことのできる道を探し求めても無駄であり、無意味なのであつた。

勝利の展望が示されず、政策転換に合理化斗争を解消し、長期柔軟な斗いを組むという総評、炭労中斗の指導がもたらしたものは、才二をこしらえさせないで三池をつつむという路線の繰返しであつた。屈辱的な藤林あつ旋案にたいして、三鉱連幹部の裏切りを理由に即座に反撃を組織しえず、斡旋案拒否のために炭労臨時大会が十日間も費したことは、才一次合理化案提示以来有効な先制攻撃を組織しえなかつた民同路線の破綻を現実に立証した。才二組合の発生の理由も、一般的に企業別組合の中に解消することでなく、かかる斗いの展望を欠いた戦術的後退の中にこそ求められなければならない。日共の企業別組合論も統一と団結論も、ブルジョアジーの集中砲撃の前には役にたたなかつた。あつ旋案拒否後、ホッパー、ベルトコンベアーの死守をめぐつて斗争は四月以来、新たな局面に入つているが、今日に至るも、資本の正面突破作戦が成功していないのは、展望のない長期柔軟斗争という指導にもかかわらず、三池労仂者の革命的エネルギーに強く支えられているからである。

そしてそのエネルギーは炭労を右傾化し、総評を全労化せんとする資本の意図を阻止しているばかりか、逆に左翼的再編の有力なテコとなつているのである。しかも、五・一九、二〇を転機として政治情勢が極度に流動化し、岸を打倒することによつて全政治局面を一変させ、革命的情勢をきり開くべき絶好の条件が生れてきている今日、階級的指導によつて三池斗争を勝利に導くべき極めて有利な状況が生れている。

過去一年半、総反撃に移るべきチャンスをその都度逃してきたことをこの流動状況のもとにおいて一挙にとり返し、「合理化斗争には勝てない」とか「企業別組合だから」というような日和見主義の論理を完全に粉砕しなければならない